

三和の歴史

日本の近代養鶏産業の基礎を築く

創業明治三十三年

三和の歴史、それは

名古屋コーチンとともに

歩んできた道

さんわグループ創始者
伊藤和四五郎

文久三年（一八六三年）二月

さんわグループの創始者である

伊藤和四五郎は尾張小牧村にて誕生

明治三十三年（一九〇〇年）飼料業として

事業を起こし伊藤和四五郎商店を創業

業界初の完全配合飼料の基礎を築く

昭和八年愛知県知多郡大高町に

四万坪の三和農場を建設し

養鶏事業を開き名古屋コーチンを始め

八万羽を育成し東洋一の規模を誇る

それまでの家内労働的武士養鶏を

昭和初期に日本の近代的な

養鶏産業としての礎を築く

純鶏名古屋コーチンの歴史は

さんわの歴史そのものなのです

昭和8年(1933年)

愛知県知多郡大高町(現名古屋市長区大高町)に
四万坪の三和農場を建設。

名古屋コーチンを始め、八万羽を育成し東洋一の規模を誇る。

日本の近代養鶏産業の基礎を築く



「伊藤和四五郎傳」(昭和13年発行)
自伝として、後世に彼の功績を
記録として残す

さんわグループの創始者である伊藤和四五郎は、文久3年(1863年)2月13日 尾張東春日井郡小牧村に誕生、37歳にて飼料業として伊藤和四五郎商店(現日本農産工業)を創業する。
養鶏の先覚である愛知の五味氏、海部氏と養鶏の実利化を唱え、一般養鶏業者に飼料の配合方法について指導を行ってきました。
後に業界初の完全飼料配合に基礎を築き、配合飼料の製造に着手。

その後、昭和8年愛知県知多郡大高町(現名古屋市長区大高町)に四万坪の広大な敷地に三和農場を建設し、養鶏事業を開始。
名古屋コーチンを始め、八万羽を育成する当時としては、東洋一の規模を誇るまでに発展いたしました。
この業績は、昭和初期のそれまでの家内労働的武士養鶏を、日本の近代的な養鶏産業としての礎となりました。

この記述は、下記より抜粋いたしました。

「伊藤和四五郎傳」
昭和13年8月15日発行

著者 足立 松陽
題字 鷺尾 順敬(東京帝大史料編纂官 文学博士)
装幀 武者小路 寛篤
出版社 合資会社 育成社
東京都神田区錦三丁目21番地

さんわグループの起源

伊藤和四五郎 日本の近代養鶏の基礎を築く



50歳の頃の伊藤和四五郎

和四五郎の誕生

文久3年(1863年)2月13日、津田藤兵衛の三男として尾張東春日井郡小牧村に生まれる。和四五郎の先祖 織田家(織田信長ら)=津田家を先祖とする。

織田(信長ら)家・津田家

津田信廣

津田藤介信光(三男)

数えて7代目

津田金三郎

津田金次郎(次男)

津田和四五郎(三男)
(後の伊藤和四五郎)

伊藤和四五郎商店開業

明治33年(1900年)37歳で小牧をあとに3男1女家6人で、名古屋市西区監町10丁目に、米穀及び飼料商としての伊藤和四五郎商店を開業。その後、肥料・雑穀・飼料商として事業を拡大。



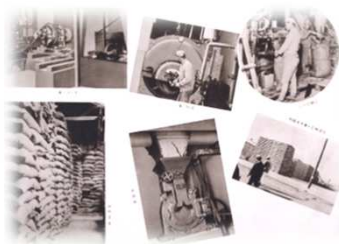
伊藤和四五郎商店 当時の仲間たち



昭和初期の伊藤和四五郎商店(名古屋市中区天王崎)

業界初の完全配合飼料の製造開始

一般養鶏業者に「飼料新報」を発行し養鶏・飼料配合方法の指導を行う。後の業界初の「完全配合飼料」の基礎を築く。



私設飼料施設保税工場完成

昭和3年(1928年)、海外よりの養鶏飼料の輸入を目的に、名古屋市熱田区飼料施設保税工場(私設)を完成、配合飼料の製造を開始する。



三和農場建設

昭和8年(1933年)愛知県知多郡大高町に四万坪の三和農場を建設し、養鶏事業を開始それまでの家内労働的武士養鶏から日本の近代的な養鶏産業の基礎を築く。名古屋コーチンを初め、八万羽を育成。東洋一の規模を誇る。東京帝国大学農学部、農林省、農林省畜産試験場、国立種鶏場など数多くの視察があった。昭和13年(1938年)5月7日久邇宮殿下、御台臨の栄によくす。



養鶏場と見学会



三和農場



三和農場の事務所



試験用飼料の測量及び配合



名古屋コーチン初生ヒナ養鶏舎



昭和初期の
最新式種鶏用組立式コロニー鶏舎



昭和初期のカナダとの取引

アメリカ・カナダ養鶏事業視察

昭和11年、第1回アメリカ・カナダ養鶏事業視察開始。
日本におけるアメリカ先進国の養鶏事業の本格的な導入を行う。

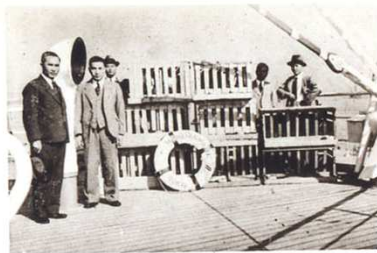
貴重な16mmフィルムや写真による、和四五郎商店、三和農場、アメリカ・カナダの養鶏視察の記録を通じて、昭和初期の日本・アメリカ・カナダの当時の様子が窺えます。



第3回目(昭和12年3月6日)、平安丸にて渡英の秩父宮様と同船



和四五郎商店、三和農場、アメリカ、カナダの
養鶏視察の貴重な記録フィルム



BC大学より輸八の300頭原種鶏



輸八の300頭原種鶏



ニューヨーク生鳥市場にて



メリランド大学にて
ヨウワグリー牧場主と大石氏



くに産工鶏種のムカンリーベのトンシワ



名譽 ハンソン氏と伊藤商店社長



ニューメー
酒蔵証帳に



あまんとせ鶏産と富康和三
三組ントンシワ



長場農井理でいふ一長場五回養鶏の簡訪社畜科園イケンコ



ムワークス洲ントンシワ
てに場化研

アメリカ・カナダ視察時の写真の一部

伊藤和四五郎の功績

日本の近代養鶏産業の基礎を築く

大正9年(1920年)伊藤和四五郎は、実業を長男憲一に譲り、57歳で隠居。
幼年期からの観世音信仰により、隠居後は、より一層深く信仰生活を送り、後に出家得度する。
四国八十八ヶ所第六十二番札所山門造営を始め、全国各地の社寺、仏閣への多額の寄進、お布施を行いました。
なかでも昭和2年(1927年)64歳でかねてからの念願であった世界一の木造十一面大観世音立像の建立を開始しました。



門井 耕雲 仏師(左側)と伊藤和四五郎(右)

世界一の木造十一面観世音立像完成 大観世音菩薩大開眼供養開催

昭和6年(1931年)9月24日、
世界一の木像による
十一面観世音立像の完成、
大開眼供養開催。

仏師 門井 耕雲作
木像 三丈三尺 約10m
アトリエ 覚王山(名古屋市千種区)
日蓮(につせん)寺
東方山腹の福寿(ふくじゅ)山
大龍寺の門前

昭和2年3月、台湾より巨木搬入
昭和3年12月、12分1模型完成



大観世音菩薩大開眼供養開催

東山観音着工 大観世音安置奉讃会開催

昭和10年(1935年)1月大観世音安置奉讃会開催。
東郊田代町唐山区内(現名古屋市千種区唐山、東山)に約1万坪を買収し、大本山総持(そうもつ)寺直末寺の護国山瑞雲(ずいうん)寺を移し、観音一大聖地建設着工。

昭和13年(1938年)大観世音奉安所、書院、庫裡完成。六角堂、願主堂の建設に入る。その後、奉安本殿、山門諸堂、忠霊堂、位牌堂の建設計画があった。
しかし、支那事変に端を発する国際情勢により、その後この事業は、計画半ばとなる。



昭和10年頃の東郊田代町地区(現名古屋市千種区付近)の絵図。
中心の東山動物園の左側に大観音の絵が描かれています。((株)水野本社 所有の絵図より)

十一面観世音立像南京へ

昭和16年（1941年）3月、南京日中友好として日本軍、中国軍、南京市民慰霊のため、南京市毘廬寺（びるじ）へ十一面観世音立像を寄贈。

そのお礼として、毘廬寺境内に伊藤和四五郎木像制作安置。しかし、その後の中国文化革命の時、この観音様を含め、多くの仏像が紅衛兵によって破壊されました。

千手観音 名古屋へ

昭和16年（1941年）5月、十一面観世音立像の返礼として、南京市毘廬寺（びるじ）の千手観音（約3.5m）が名古屋へ贈られた。



現在の平和堂内の千手観音（右）と
製作当時の十一面観音12分1模型（左）

平和堂完成

昭和39年（1964年）3月、市民の戦災復興事業の一貫として、名古屋市千種区の平和公園内に平和堂完成。

名古屋市東区建中寺に仮安置の千手観音を平和堂本尊として安置。現在に至る。



名古屋市千種区平和公園内平和堂

伊藤和四五郎没

昭和18年(1943年) 6月27日

現名古屋市昭和区寶田(ほうでん)町にてその生涯を終える。
享年80歳。



さんわグループ家系図

